

渡辺尚志編

『アーカイブズの現在・未来・可能性を考える』

——歴史研究と
歴史教育の現場から』



評者：清水 善仁

本書は、一橋大学大学院社会学研究科に開講された授業科目「先端課題研究13 社会科学におけるアーカイブズ活用の可能性」における共同研究の成果である。近年、日本各地の大学や大学院においてアーカイブズにかんする授業が開講されているが、その教育・研究の成果がこのように一書にまとめられるケースはさほど多くない⁽¹⁾。本書は、この授業のなかでおこなわれた研究発表やフィールドワーク等の成果を集約した論文集として発刊されたものである。

本書冒頭の「編者まえがき」において、本書の特徴として「アーカイブズ（文書館）の現状と未来、あるいはアーカイブズ（記録資料）の新たな利用可能性について論じたところに独自性がある」（1頁）と述べられている。文書館のどのような現状と未来が語られ、そして記録資料の新たな利用可能性がどのように拓かれるのか——まずは本書の構成を掲げ、各章の概要を紹介していきたい。

第一部 日本前近代史研究とアーカイブズ 第一章 訴訟からみた近世社会の特質——

信濃国松代藩領を事例として（渡辺尚志）
第二章 慶応期幕府奏者番における師弟関係と手留管理（吉川紗里矢）

第三章 明治前期における「好古家」の新聞受容——埼玉県比企郡番匠村小室元長の交友関係を中心に（古畑侑亮）

第二部 近現代の歴史研究・歴史教育とアーカイブズ

第四章 市民団体（市民アーカイブ多摩）における市民活動一次資料アーカイブズ化の取り組み——「懸樋哲夫氏旧蔵電磁波運動資料」の整理過程を事例に（長島祐基）

第五章 一九六〇年代の一橋大学における「大学の自治」論と教職員組合——史料整理から大学史における組合の位置づけを考える（伴野文亮）

第六章 歴史教育における史料活用の可能性——柳条湖事件を描いた漫画を例にして（関原正裕）

第三部 海外におけるアーカイブズと歴史研究

第七章 グラムにおける追悼・慰霊の空間——「想起の場」としての戦跡を考える（新井 隆）

第八章 キリー・キャンベルの収集活動から見る歴史意識の変容——南アフリカにおけるアーカイブズ構築の一事例（上林朋広）

第一章は、信濃国松代藩真田家文書という大名アーカイブズ（記録資料群）を活用して、「武士—百姓関係の特質の一端」（11頁）を検討する。具体的には、江戸時代後期に松代藩領にお

(1) 大学・大学院でのアーカイブズ学教育・研究をふまえた書籍の刊行として、他に小川千代子他著『アーカイブを学ぶ——東京大学大学院講義録「アーカイブの世界」』岩田書院、2007年、等がある。

いて起こった荒地開発をめぐる争論を取り上げ、その発端、争点、展開、結末について、真田家文書に残された資料を引用しながら時系列的に整理・分析し、当該争論のプロセスから看取できる武士一百姓関係の特質を明らかにしている。

一連の分析は歴史学の手法でなされており、紛うことなくこれは日本近世史の論文である。しかし、本論文が本書に含まれているのは、真田家文書という大名アーカイブズのもつ性質に起因している。多くの場合、大名家のアーカイブズには藩庁やその家で作成・収受された、いわば「武家」の資料しか保存されないのであるが、真田家文書には「藩領村々から提出された多数の「村方文書」(12頁)が残されている。したがって、真田家文書は「武家」と「村」の資料が「同居」するユニークな資料群であり、歴史研究においても「武家」と「村」の双方の資料から多面的にアプローチすることができるのである。その意味で、真田家文書を活用した藩領下の荒地開発争論という歴史的な事象の検討は、「大名アーカイブズの新たな活用法を模索する試み」(3頁)として位置づけられるのである。

第二章は、江戸幕府の役職の一つである奏者番の任務遂行にあたって重要な記録となる「手留」の収集・分類・保存について、幕末に奏者番を務めた秋元礼朝を事例に検討する。先役(師範)の奏者番からの「手留」の伝達、蓄積された「手留」の内容分析、さらに秋元家における「手留」の分類・管理の実態等について、著者は丹念に資料にあたり堅実な実証を重ねている。

秋元礼朝を含む秋元家の資料は、現在館林市立図書館において「秋元文庫」として保存・公開されており、著者はこの大名アーカイブズを活用して本論文をまとめた。江戸時代の文書管理史研究は武家のみならず、朝廷、村、都市等、様々な分野において進展がなされている。

本論文もそうした研究に連なるものであるが、「手留」の分類や保存・活用の実態をより精緻に検討した点で、従来の奏者番の文書管理史研究をさらに補強するものであるし、大名アーカイブズの有する資料的価値がいかに発揮された内容のものといえるだろう。

なお、本論文中、「現用段階から非現用段階に至る変遷」(46頁)のように、江戸時代の文書管理に「現用」「非現用」の概念を導入しているところがあるが、その点については注意を要したい。この概念はあくまでも近代行政機関等における文書管理規則の類に明記された、文書の保存期間という明確な基準のうえに成立するものであるから、奏者番にかかる文書の管理に当該規則のようなものがあれば別だが、前近代の文書にすべからずこの概念を当てはめることには慎重であらねばならない。

第三章は、明治前期に「好古家」と呼ばれた人々が、当該期の新聞をどのように受容していたかという点を検討することを目的に、好古家たちが新聞から抜書した記事をまとめた「随筆」という資料に着目して分析する。著者はその題材として、埼玉県比企郡番匠村の小室元長とその文書である「小室家文書」(埼玉県立文書館所蔵)を取り上げ、まず明治前期の新聞の購読や貸借の状況を明らかにし、新聞をめぐる人々の意識を整理する。そのうえで、元長がまとめた『南木廼家随筆』という資料をもとに、新聞から抜書した記事の内容について考察をおこない、自身の職分や由緒意識等が抜書をおこなう際の背景としてあることを指摘する。

本論文は、著者の言を借りれば、「随筆という資料のもつ可能性を探る一助」(87頁)としてなされたものである。小室元長あるいは小室家文書については多くの先行研究があるなかで、当該期の新聞受容をめぐる新たな視点が提供されたことは重要である。今後、元長が抜

書する新聞記事の選別基準やそれと当該期の政治・社会との関係等について、今回取り上げられなかった内容（分類）のものも含めてさらに追究されることによって、元長の認識はもとより、随筆という資料が形成される背景やプロセスがより明確にされることを期待したい。

第四章は、行政や大学等の公的な機関ではない市民団体による一次資料の整理・保存の取り組みについてまとめる。市民団体である市民アーカイブ多摩が寄贈を受けた「懸樋哲夫氏旧蔵電磁波運動資料」という一次資料について、その整理全般を担当した著者が寄贈にいたる経緯、整理の方針、所収資料の概要、保存・公開をめぐる課題を紹介し、市民団体がこうした資料群を保存する意義を述べている。

著者も指摘するように、昨今は公的な機関においても地域や個人の貴重な資料を受け入れて保存・管理することが難しくなりつつある。そのため原蔵者が引き受け手の無い資料を廃棄する事例が生まれている状況のなかで、市民団体のような必ずしも予算や人員が豊富ではない組織が、貴重な資料群の整理・保存を引き受けることがますます増加することは想像に難くない。個々の組織が資料の整理・公開をおこなうにあたり、どこから始め、どのように進めるべきか、そうした情報を広く共有することは重要なことである。その意味で、本論文はその先行事例としての位置づけを有するものである。

第五章は、戦後の一橋大学史における組合員の存在について、新たに整理された「一橋大学教職員組合所蔵史料」等を手掛かりに、1960年代後半の「大学問題」と、それに付随して現出した「大学の自治」論に即して検討する。まず、1960年代後半の「大学問題」である大学管理制度改革問題と学園紛争について、一橋大学におけるそれらの展開を追跡し、そのなかで表明された大学・学生それぞれの「大学の自治」をめ

ぐる言説を紹介する。そのうえで、「大学問題」のなかでの「大学の自治」に対する組合員の認識の諸相について、先記の資料群に含まれる組合の機関誌をもとに明らかにされる。

これまで一橋大学の歴史において着目されてこなかった組合あるいは組合員という存在が、資料の整理・保全活動によって歴史研究の対象となり、当該大学史のなかに位置づけられることはたいへん意義があることであり、本論文はまさに資料整理がもたらした貴重な成果であるといえよう。一橋大学に限らず、多くの大学において資料の「発掘」が進めば、より豊かな大学史像を描くことができることを示している。

ただ、論文のなかで、組合の実態や組合員の定義を明確にしておくべきではなかったか。「教職員組合」とある以上、そこには著者がこれまで暗黙裡に大学史の登場人物と指定されてきた（175頁）とする教員も含まれるのではないか（論文のなかでも「組合員」と「教職員」が混在している箇所もある）。「職員」ではなく「組合員」としてその存在を大学史の俎上に載せることの意義をより明確にするためにも、組合員という存在が学内でどのような位置を占め、またどのような活動をおこない、どれほどの影響力を有していたのかという基礎的な事実をまず提示する必要があるように感じた。

第六章は、歴史教育における画像史料の活用にかんする実践記録である。高等学校の社会科教員を長く務める著者がおこなった満州事変をテーマにした日本史Bの授業で、著者が購入した柳条湖事件の画像資料（漫画）が活用された。著者はこの資料をもとに授業を構成し、生徒にも問いかけながら満州事変やその周辺の歴史を深めていく。生徒からの感想をふまえ、「一方的な講義式授業からある程度は脱することはできたのではないかと思う」（224頁）と述べる一方、異なる指導方法への見解も述べて

いる。また、類似の画像資料を紹介し、あわせて活用する可能性についても指摘する。

本論文の対象は画像資料であるが、文書資料も含めた記録資料を教育の場面でどのように活用するかというテーマについては、これまでも多くの蓄積がある。教育の素材として記録資料が有する価値は低くないし、記録資料が活用されることでそれ自体に対する認識も深まる。すなわち、教育において記録資料が活用されることは、アーカイブズという存在を社会に根付かせる一つの有効な方法でもありうる。そのような意味で、様々なテーマや対象にもとづく記録資料を活用した教育実践の詳細が提供されることの意義は小さくない。本論文では、著者が購入した実物の画像資料が対象となったが、アーカイブズ機関がデジタルアーカイブの機能を提供し、利用者が資料のデジタル画像に容易にアクセスできる昨今の状況をみると、教育における画像資料の活用の幅はさらに広がっていくのではないだろうか。

第七章は、戦争の痕跡である「戦跡」を「記憶のアーカイブ」(235頁)と捉え、アジア・太平洋戦争の記憶を想起することとどのように関連するのかを、グアムをフィールドに検討する。著者は、「戦跡」を「単なる「戦いの跡」ではなく、生者と死者の関係性が形作られていく場である」(238頁)とし、「戦跡」そのものはもとより、そこでおこなわれる追悼・慰霊のもつ意義を重視する。グアムに存在する各種の「戦跡」がどのように形成されたのか、また戦没者の追悼・慰霊の諸行事にみえるグアムと日本とのつながり(戦争の記憶をめぐる「回路」の形成)等に目を向け、戦争の記憶を想起するに至る諸要素——「その時々時代の背景や社会状況、想起する主体」(268頁)——の存在が重要な意味をもつことを指摘する。

本論文は、フィールドワークや聞き取り調査

といった社会学的手法を駆使して、個々の「戦跡」や追悼・慰霊をめぐる実態を明らかにしており、文書資料だけでは構築しえない「戦跡」をめぐる戦争の記憶の論理を提示している。戦争の記憶をめぐる問題はアーカイブズ学の分野でも重要なテーマであり、これまでも文書資料の共有化や活用等の点で検討はなされてきたが、アーカイブズというものをより広い意味で捉えるならば、「戦跡」「モニュメント」「メモリアル」等の「記憶のアーカイブ」もまた重要な存在であり、そのことを明らかにした本論文のもつ意義は大きい。

第八章は、南アフリカにかかわる史資料(アフリカナ)の収集家として著名なキリー・キャンベルの収集活動に焦点を当て、そのコレクションがどのようにして形成されたのかを彼女の歴史意識の変容過程から明らかにする。まずキャンベルの生涯とアフリカナの収集活動の軌跡を整理したうえで、アフリカナを収集することそれ自体の意義を検討する。著者はメンデルズゾーンとガビンズという二人の収集家による資料の目録化や利用・公開の取り組みを、入植者社会の発展という観念を支え(290頁)、あるいはアパルトヘイト政策のイデオロギーを裏書きする役割を担ったものであると評価する(294～295頁)。そして、再びキャンベルの収集活動に戻り、彼女の史資料収集における焦点の変化について、当該期の政治や社会の変化との関わりから論じている。

本論文は、南アフリカという地域において活動した一人の収集家の軌跡と、彼女が残したアフリカナ(アーカイブズ)の形成過程について詳細に追究したものである。日本においても個人によるアーカイブズの存在は多数みられ、それがどのようなプロセスを経て形成されたのかを論じたものは少なくないが、アフリカ地域におけるこのような事例を紹介・検討したものは

ほとんどなく、重要な研究成果として位置づけられよう。日本であれ諸外国であれ、こうした個人アーカイブズをめぐる事例を蓄積することは、人間とアーカイブズとの間に様々な関係性が存在していたことの意味を明らかにすることであり、そこからさらに国家や社会あるいは記憶というものに対する人間の眼差しをも垣間見ることができる。本論文はそうした多様な論点への視座を与えてくれるのである。

以上、本書収録の全八章について紹介と寸評を試みた。評者の力不足により、誤読等の箇所があるかもしれない。それらはすべて評者の責に帰するものであり、著者各位のご海容を乞いたい。

最後に、全体を読み終えた感想を述べたい。冒頭で紹介したように、本書の特徴は「アーカイブズ（文書館）の現状と未来、あるいはアーカイブズ（記録資料）の新たな利用可能性について論じたところに独自性がある」と記されているが、読み終えてみると、全体的に後者——記録資料の新たな利用可能性——の検討に比重が置かれており、それと比較すると、前者——文書館の現状と未来——についてはあまり触れられなかったという印象が残った。記録資料の多様な利用可能性を担保する存在の一つに文書館があることは疑いないことであり、文書館の抱える課題や目指すべき方向性等、前者をめぐ

る様々な論点についても出来得れば幅広く取り上げて欲しかったというのが率直な感想である。

本書の編者である渡辺尚志氏は「編者まえがき」のなかで、「研究者は、アーカイブズ（文書館）の利用者であると同時に、アーカイブズを内外から支える主体でもある」（1頁）と述べているが、その点において評者もまったく異論はない。電子記録やインターネットを介した情報の取得・交換が一般化していくなかで、文書館という存在やその活動も常に変化し続けなければならない。同時に、最近の社会的な情勢等を反映して文書館の存在意義があらためて認識されつつある今日、アーカイブズ学はもとより、様々な分野の研究者によって「アーカイブズの現在・未来・可能性」が検討されることは、アーカイブズのより確実な将来世代への継承のために重要なことである。その意味で、本書のように多様な学問の視点からアーカイブズについて研究される取り組みが今後さらに拡がることを期待して擱筆したい。

（渡辺尚志編『アーカイブズの現在・未来・可能性を考える——歴史研究と歴史教育の現場から』法政大学出版局、2016年12月、319+(2)頁、定価5,000円+税）

（しみず・よしひと 法政大学大原社会問題研究所准教授）